

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18730547
 研究課題名（和文）児童の認識に着目した音痴克服のための歌唱指導法に関する実証的研究
 研究課題名（英文）Voice pedagogy for *Onchi* children: An empirical study of internal feedback and mental development
 研究代表者
 小畑 千尋（OBATA CHIHIRO）
 東京成徳大学・子ども学部・准教授
 研究者番号：20364698

研究成果の概要：

本研究の目的は、児童が自分自身の歌唱の音高・音程が合っているかどうか認知できる（内的フィードバックができる）こと、同時に児童の心理面に着目した音痴克服のための指導法の有効性を実証的に明らかにすることである。小学校の授業における継続的な歌唱指導の観察、児童を対象とした縦断的な歌唱調査、事例指導の実践などを行い、児童の内的フィードバックの発達過程が明らかとなり、内的フィードバックに焦点をあてた指導の有効性が確認された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000円	0円	1,200,000円
2007年度	900,000円	0円	900,000円
2008年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
年度			
年度			
総計	2,900,000円	240,000円	3,140,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音痴、音痴コンプレックス、児童、内的フィードバック、歌唱指導

1. 研究開始当初の背景

歌唱における「音痴」は先天的なものであると一般的に信じられている。そのことが原因し、音痴で悩む者には、子どもとの関わり、社会的参加など、実生活に支障をきたしている場合も多い（小畑 2005b 他）。

音痴を克服するためには、表出された歌声のみに着目した指導では、根本的な解決にはならない。歌唱者が自身の歌唱について音程が合っているかどうかを認知できなければ、自分自身で歌唱時に音程を修正できる力には結びつかない。すなわち、音痴克服には、

内的フィードバック能力（自分自身の歌唱の音高・音程が合っているかどうか認知できる能力）の獲得が必須である。

筆者が行った成人の音痴克服の指導事例では、対象者の内的フィードバック能力が獲得され、音痴コンプレックスも克服できることが確認されている（小畑 2002a, 2005a 他）。また成人対象者の中には、小学校の音楽の授業で音痴コンプレックスを持つようになったケースが極めて多く、小学生の頃から内的フィードバックもできなかったと推察できる事例も多くみられている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、児童が自分自身の歌唱において内的フィードバックができること、同時に児童の心理面に着目した音痴克服のための指導法の有効性を実証的に明らかにすることである。具体的に以下の3項目を実施する。

(1) 小学校の音楽の授業における歌唱指導に関する継続的な調査を通して、児童の歌唱技能、特に内的フィードバック能力について明らかにする。

(2) 成人を対象とした音痴克服のためのグループ指導の実践を通して、音高・音程を正しく歌えない児童、内的フィードバックができない児童への歌唱指導実践に向けた指導形態についての検討を行う。

(3) 音高・音程を正しく歌えない児童、内的フィードバックができない児童を対象に歌唱指導を実施し、指導の有効性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 音高・音程を正しく歌うことのできない児童とその環境(対象児童をとりまく他の児童、音楽科教員)に焦点をあて、小学校の音楽の授業の継続的な観察、児童の歌唱技能について調査を行う。歌唱技能については、声によるピッチマッチ、既成曲の歌唱、内的フィードバックができていないかどうかについて調べる。調査過程はすべて録音記録する。

(2) 音痴コンプレックスを持ち、内的フィードバックができず、自主的に指導を受けることを申し出てきた成人を対象にグループ指導を行い、指導の有効性と相補間の関わりについて分析する。

(3) 上記(1)(2)の結果を踏まえた上で、研究協力を得られる児童の中から音高・音程を正しく歌うことのできない児童3名から5名を選定し、個別指導、並びにグループ指導を行う。指導過程の音声はすべて録音記録し、指導過程を歌唱技能面、心理的側面から分析する。

4. 研究成果

(1) 小学校における歌唱調査

協力校を選定し、小学校中・高学年の音楽の授業における歌唱指導に焦点をあてた授業観察を3年間行った。A小学校の児童の歌唱発達過程を観察すると共に、担当音楽科教員に対するインタビューと意見交換を随時行うことにより、音楽科教員の音高・音程を正しく歌うことのできない児童に対する意識の変化を明らかにすることができた。その結果は、対象児童を小学校高学年から中・高学年に広げるなど、実態調査・事例指導に反映させた。

A小学校において、2007年6月に4年生3クラス(83名)、5年生2クラス(77名)、2008年1月に3年生3クラス(97名)、4年生3クラス(83名)、2008年10月に4年生3クラス(97名)、5年生3クラス(87名)を対象に単音の声によるピッチマッチ、内的フィードバック、児童が授業で学習している曲について個別に調査を行った。ここでは、縦断的調査と分析が可能であった小学4年生83名の調査結果を報告する。

小学4年生(6月)を対象に実施した第1回調査では、声によるピッチマッチについては、約75%が正しい音高に合わせて歌えた(以下、表1参照)。一方、歌唱における内的フィードバックができる児童は約50%、できない児童が約50%であった。

同じ児童を対象とした第2回調査を約7ヶ月後の第4学年の1月に、第3回調査を約16ヶ月後の第5学年の10月に実施した。

声によるピッチマッチで正しい音高に合わせられた児童数は、年齢と共に増え、第3回調査では95%となっている。しかし内的フィードバックに関しては、内的フィードバックができる児童が増加しているものの、第3回の調査を行った小学5年生10月の段階でも、30%以上の児童が内的フィードバックができないことが明らかとなった。

表1 声によるピッチマッチの正誤と内的フィードバックに関する発言の経年的変化

声によるピッチマッチ	内的フィードバックに関する発言	第1回(第4学年6月)	第2回(第4学年1月)	第3回(第5学年10月)
合う	合わせられた	38 (48%)	47 (59%)	53 (64%)
	わからない	17 (21%)	17 (22%)	17 (20%)
	合わせられなかった	4 (5%)	6 (8%)	9 (11%)
合わない	合わせられた	11 (14%)	5 (6%)	1 (1%)
	わからない	7 (9%)	3 (4%)	1 (1%)
	合わせられなかった	3 (4%)	1 (1%)	2 (2%)
児童数(名)		80	79	83

* 児童数は無効回答を除いた数である。

以上の調査結果から、表出された歌唱だけに注目しては、児童がどのように自分自身の歌唱を認知しているのかを見逃す可能性があることが示唆された。また調査中の児童の様子から、歌唱の際に、自分自身の音高・音程が合っているかどうか、つまり内的フィードバックを意識した経験がないと推察されるケースも多々あった。

(2) 成人を対象とした音痴克服のためのグループ指導

児童の歌唱実践に向けた指導形態について検討するために、成人を対象としたグループ指導を行った。実施した指導事例の中から、今後の基礎的資料として有効な2事例をここでは報告する。指導内容は、声によるピッチマッチ、わらべうた、連続する3音から5音の模唱、対象者に応じた課題(子どものための歌、ポップスなど)を中心に行った。

事例

対象者は、内的フィードバックができず、音痴コンプレックスを持つ保育者養成課程在籍の大学生男子Bである。本事例では、同じ課程に在籍する大学生男子C・Dの2名が指導者役として加わった。約8ヶ月間に13回のレッスンを実施した。Bに対するレッスンのうち数回はC、Dに指導を実施させ、筆者がスーパーバイザーとして指導にあたった。Dは歌唱が得意な学生であり、Cは以前音痴を克服するために筆者の指導を受け、音痴を克服した経験を持つ。

指導の結果、Bは内的フィードバックができるようになり、また表出する音高・音程が外れた際に、自身で正しい音程に修正できるようになった。C、Dは、共に外的フィードバック(指導者が対象者の歌唱に対して行う評価行動の中で、特に音高・音程に関するもの)を与えることができるようになり、さらにBの状況に応じて必要な指導を考案する場面などもみられた。「音痴」については、Cは自身の経験から、DはBの音痴克服前と現在の歌唱について知っていることから、「音痴は克服できる」という認識を持っていた。さらに指導者として関わることで、自らも音痴克服の指導ができるという認識が変わった。

事例

対象者は、保育者養成課程在籍の大学生男子E・F、女子Gの3名である。約5ヶ月間に14回のレッスンを実施した。3名とも内的フィードバックができず、音痴コンプレックスを持っていた。指導の結果、音高弁別、内的フィードバックについて3名とも向上した。Gは他の2名と比較して初回から内的フィードバックができず、また、実際に音程が外れることも多かった。そのため、第11回から個別指導を実施したが、より初期の段階で個別指導を実施する必要性があったと考えられる。課題ができた時、対象者同士で誉める場面は多々みられた。しかし具体的な外的フィードバックを対象者同士で与えられたのは、指導終盤に入ってからである。音高弁別ができて、自分自身の歌唱に自信が持てない段階では、他者の歌唱の音高・音程

について指摘しあうことが難しいと推察でき、個別指導とグループ指導の併用の必要性が示唆された。

(3) 音高・音程を正しく歌えない児童、内的フィードバックができない児童を対象とした歌唱指導

研究成果(1)(2)を踏まえ、音高・音程を正しく歌えない児童、内的フィードバックができない児童を対象とした歌唱指導事例の実践を行った。ここではその中から、音痴克服指導における基礎的資料として有効と思われる個別指導、及び小学校の音楽の授業での指導2事例を報告する。

事例

対象者は、音高・音程を正しく歌うことのできない児童H(9才女子)である。H本人だけでなくHの保護者も、Hが音高・音程を正しく歌うことができないことを気にしている。Hは、Q小学校の合唱部に入部を希望したが、歌唱の試験で落ち、入部できなかった経験を持つ。

約2ヶ月間に7回の個別指導を行った。その結果、内的フィードバックができるようになり、また音高・音程が外れた時に、自身で修正できるようになった。Hは、指導を受け始めてから、小学校での音楽の授業中に他の児童たちの音高・音程と自分自身の歌唱の音高・音程が合っているのが分かるようになったと言う。歌唱時に内的フィードバックに意識を向けられると推察される発言が多く聞かれるようになった。さらに、歌うことに対する前向きな行動がみられ、心理面における変化も確認された。過去に実施した成人事例と比較し、短期間における向上がみられ、指導の有効性が明らかとなった。

事例

I小学校において、音高・音程を正しく歌えない男子3名(J、K、L)を含む第6学年1クラス11名の歌唱指導を実施した。指導教材は、指導実施時期に授業内で対象児童たちが取り組んでいた2部合唱の曲を用いた。研究成果(1)の小学校における歌唱調査、研究成果(2)のグループ指導に関する調査、また上記事例の児童に対する個別指導における研究成果を踏まえた上で指導を行った。自主的に指導を受けることを申し出てきた他の事例と比較し、本事例では児童本人が音高・音程に関して意識していないことも考えられ、指導過程で歌唱に対するコンプレックスを植えつけないように、特に児童の心理面を考慮した。

指導は、グループ指導と個別指導を併用した。個別指導は、音高・音程を正しく歌うことのできる児童も含めた全員の児童に対し

で行い、J、K、Lについては内的フィードバックに焦点をあてた指導を実施した。特にJについては、同一時の2音の音高感覚の欠如がみられた。Jの歌う音高に筆者が音高を合わせて歌うことを繰り返し行う過程で、Jが自身で音高、音程を修正できる場が確認できた。また児童同士が他の児童の向上を認め合う発言も聞かれ、授業場面において児童の心理面を考慮し、且つ内的フィードバックを向上させる効果的な指導であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小畑千尋 (2009) 「お稽古ごと教室の現場から-ピアノレッスンの現在」『児童心理』891 pp.82-87. 査読無

Chihiro OBATA (2007)

Feedback and Poor Pitch Singing: A Study of Adult *Onchi*

ASIA-PACIFIC JOURNAL FOR ARTS EDUCATION
Volume5, Number2 pp.27-36. 査読有

[学会発表](計10件)

小畑千尋 (2008年11月9日) 「児童の歌唱における内的フィードバック 小学4年生を対象とした歌唱調査の分析を通して」日本音楽教育学会第39回全国大会 (於：国立音楽大学)

Chihiro OBATA (2008年7月22日)

Group Approaches for Instructing Poor Pitch Singers: Case Studies in Overcoming *Onchi*

The 28th ISME World Conference Bologna (於：イタリア)

小畑千尋 (2008年5月18日) 「『音痴』克服指導における相補的サポートに関する研究」日本保育学会第61回全国大会 (於：名古屋市立大学)

小畑千尋 (2008年5月18日) 「保育者養成における『音痴』克服」(シンポジウム：今川恭子他6名「保育者養成において学生に「表現」をどのように指導するか(4)なぜ、なんのために、どう歌うのか」)日本保育学会第61回全国大会 (於：名古屋市立大学)

小畑千尋 (2007年11月10日) 「『音痴』克服における効果的なグループ指導のあり方 グループ指導3事例の検討を通して」日本音楽教育学会第38回大会 (於：岐阜大学)

小畑千尋 (2007年9月29日) 「『音痴』克服のための指導に関する実践的研究」日本音楽教育学会関東支部例会

(於：立教大学)

小畑千尋 (2007年5月26日) 「音痴と発声」(シンポジウム「児童・生徒にどのように発声を指導していくべきか」)日本音楽発声学会第6回教育部会 (於：芸能花伝舎)

小畑千尋 (2007年5月19日) 「『音痴』克服指導における相補的サポートに関する研究」日本保育学会第60回大会

(於：十文字学園女子大学)

小畑千尋 (2006年10月29日) 「『音痴』克服指導に関わる学生の指導者としての成長 保育士養成課程における事例分析を中心として」日本音楽教育学会第37回全国大会 (於：千葉大学)

小畑千尋 (2006年5月21日) 「保育者養成における歌唱指導に関する研究 『音痴』克服の事例分析」日本保育学会第59回大会 (於：浅井学園大学)

[図書](計3件)

今川恭子監修 (2008) 『音楽のしくみ 歌って動いてつくってわかる音楽理論』教育芸術社 (共著：pp.8-15.担当)

有本真紀、阪井恵、山下薫子編著 (2008) 『教員養成課程 小学校音楽科教育法』教育芸術社 (共著：pp.12-13, 16-19.担当)

小畑千尋 (2007) 「『音痴』克服の指導に関する実践的研究」多賀出版 212p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小畑 千尋 (OBATA CHIHIRO)

東京成徳大学・子ども学部・准教授
研究者番号：20364698

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：